

＝ 時代が、所が変わっても、真ん中に人 ＝

今年に入って加盟組合の結成祝賀会など周年行事が続いている。結成10年から70年までとその内容は様々だが、その名の通り先達への感謝と祝いのある場であるとともに、それぞれの組織の節目に歴史を振り返りつつ、次に向けた心合わせと決意の場でもある。

開会にあたっての主催者挨拶をはじめ、来賓の経営側代表の祝辞も、互いに敬意を払いつつ、時代に翻弄され国際競争が激化する中で、ものづくり産業が幾度となく経験し生き残りをかけて、もがき苦しんだ経営諸施策について触れられている。その取り組みを振り返り、乗り越えてきた労使関係を紐解きながら、これからも健全な労使関係を引き継いでいこうという熱い思いが語られ、招待いただいた側にとっても、あらためて気の引き締まる思いであった。

今年、あの世界を震撼させた2008年9月15日のリーマンブラザーズの経営破綻、いわゆるリーマンショックから丁度10年にあたる。昭和のオイルショック、そして1990年代のバブルの崩壊以降、我が国のものづくり産業はグローバル経済・社会の中でその荒波に晒されながら、まさに産業・企業の生き残りをかけ、企業の合併や事業統合、合理化・分社化等、企業基盤の維持・拡大に向けた経営諸施策を進めてきたが、それを実行できたのは雇用の確保を第一とする先輩たちの苦渋の決断があったからに他ならない。そこには、働く仲間の雇用と生活の安心・安定があればこそ、次につなげるとの信念が動かしたものと受け止めている。

IOTやAIの進展に伴う第四次産業革命への対応は、避けて通れない課題と大会でも触れさせてもらったが、形は変わろうとも世界を相手とするものづくり産業の宿命として、先達から引き継いだ変化への対応力に磨きをかけ、常に先を見据えた企業戦略と職場の理解と行動が相まってこそ、産業・企業の発展と働く者の安心・安定が確立できることを忘れてならない。

9月下旬、世界のものづくり産業を中心に組織しているインダストリーオール造船船舶解撤部会業務でシンガポールとインドに赴いた。シンガポールにおいては、少子化や定年制の課題と雇用問題、そしてまさに日本が経験した各種の経営諸施策への対応を現実課題として抱えていること。一方、インドでは、言われ続けて久しい船舶解撤産業における安全・環境問題があげられた。形は違えど、いずれもかつて我が国・ものづくり産業が経験し、そして、引き続き抱える課題でもある。

議論の中で、基幹労連の取り組みを問われ、「変化への対応力は、経営手腕だけでは成り立たず、労働組合だけでも成し得ない、労使双方の心合わせと力合わせが相まって成し得るもの。そして、経営諸施策も安全も、労働組合運動も、あらゆる取り組みのど真ん中に人。それがJBU（基幹労連）の基軸である」と答えた。『YES!』、肌の色も言葉も違うが、めざすべき労働運動の先は同じ。もちろん答弁は通訳を通じてだが、YES!の後のシェイクハンドは互いの志を疑う余地もないことを感じた。

日本の労働運動のスタートは周年行事が語るように、その本流は戦後であり、世界から見れば後発だが、健全な労使関係の先がけであることは間違いない。

時代が変わろうと所が変わろうと、AIが入ろうが、何よりも大切にしていかなければならない運動の基軸は普遍である。あらゆる取り組みにおいて「ど真ん中に人」、そして、仲間の安全と健康の確保である。互いに自信と誇りをもって邁進していこう。

ご安全に

2018年10月3日
日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長 神田 健一